

現代ギリシャ語の瞬時態未来と  
継続態未来についての一考察

竹 島 俊 之

1. 未来時制の意味について

1)

筆者は「古典ギリシャ語における未来時制についての一考察」という論文の中で次のことを主張した。

未来時制は過去—現在—未来という客観的な時間段階を表しているのではなく、話し手のモダリティを表し、そのモダリティは各人称毎に次のような意味をもって現れる。

1 人称単数：多くの場合に話し手の「意志」を聞き手に対して伝える。

1 人称複数：話し手の「意志」，「勧誘」，「推量」を聞き手に伝える。

2 人称：話し手の聞き手に対する「意志」，「要求」，「命令」，「脅迫」を聞き手に直接伝える。

3 人称：多くの場合に第三者に対する話し手の「推量」まれに第三者に対する話し手の「意志」を聞き手に伝える。

この事を例を挙げて説明しておこう。この場合、ゴート語の時制体系から判断して、一度は未来時制を完全に消失したと思われるゲルマン系の諸言語とは異なり、形態を変えながらもこの時制を継承した現代ギリシャ語でも同じことが言えるので、例文は現代語訳を提示する。

2. 1. 1. 1 人称単数：話し手の「意志」を聞き手に伝える

(1)  $\mu\acute{\alpha}\ \sigma\acute{\alpha}\ \sigma\omicron\upsilon\ \pi\acute{\omega}\ \alpha\upsilon\tau\acute{o}\ \pi\omicron\upsilon\ \mu\prime\ \acute{\epsilon}\rho\omega\tau\acute{\alpha}\varsigma$  η 242

それだから、お尋ねあったことだけをお話ししよう

まず  $\acute{\epsilon}\rho\omega$  (φημί, λέγωの未来形) が使われている用例を前述の論文の中でホメロス『イーリアス』第1巻～12巻、『オデュッセイア』全巻、クセノフォン『アナバシス』において検証し、1 人称の未来形はすべて話し手の「意志」と捉えてよいことが正当であることを主張した。次にその他の陳述動詞の未来形の用例を調べた( )の動詞は古典ギリシャ語の形式)。

(2) ( $\acute{\alpha}\gamma\omicron\rho\epsilon\acute{\upsilon}\sigma\omega$ )

λοιπόν, ἐγὼ θὰ σοῦ μιλήσω γι' αὐτὰ μὲ μεγάλη εὐλικρίνεια. α 179  
それでは、すっかり隠さずにお話ししよう

(3) ( ἐκ.....ἐρέω )

'Αλλά καθαρά θὰ σοῦ πῶ αὐτὸ ποὺ θεὸς νὰ γίνῃ δόχως ἄλλο. Β 257

それではこのことをはっきりお前に言っておこう, このことは必ず実行されることになろう

(4) ( καταλέξω )

ἐγὼ θὰ σοῦ διηγηθῶ. γ 80

あなたに説明しよう

(5) ( μαντεύσομαι )

Μὰ τώρα ἐγὼ θὰ σοῦ κάμω μιὰ προφητεία α 200

今ここで予言しよう

(6) ( ὑποθήσομαι )

Καὶ σένα τὸν ἴδιο θὰ συμβουλευέσω φρόνιμα. α 279

そなた自身に忠告しておこう

(7) ( ἐνίψω )

ὥστε ποτὲ δὲν θὰ πῶ ἐγὼ αὐτὸν τὸ λόγο. β 137

そんなことは絶対に言わないぞ

(8) ( κρύψω, ἐπικεύσω )

ἀπ' αὐτὰ δὲν θὰ σοῦ κρύψω οὔτε λέξη κί οὔτε θὰ προσπαθήσω  
νὰ σκεπάσω τίποτε. δ 350

どんな言葉も隠すようなことはすまい

次に陳述動詞以外の動詞を取り上げて、どの場合でも 1人称の未来形では話し手の「意志」が表されている事を例証した。

(9) ( δώσω )

πρωτύτερα θάνατο θὰ σοῦ δώσω. θ 166

それ以前に死神にお前を引き渡してやろう

(10) ( ἄξω )

τὸ τιμητικὸ τὸ δῶρο τὸ δικαῖο σοῦ ἢ τοῦ Αἴαντος ἢ τοῦ Ὀδυσσεύς  
ἀρπάουνας θὰ φέρω. Α 138

お前の立派な分け前をあるいはアイアースのあるいはオデュッセウスのそれを奪って持ってきてやろう。

## 2.1.2. 1人称単数：話し手の「推量」

(11) ( ἔσομαι )

Δυστυχία μου, φαίνεται κι ἄργότερα θὰ 'μαι ἀνάξιος κι ἀδύναμος, σ 131

おお、なんたることか私は今後は卑怯者で弱虫のろくでなしと  
いうことになろう

(12) ( ἔσομαι )

Καλέ μου, ἡ παλληκαριά σου θὰ σὲ καταστρέψῃ

Μὰ δὲ λυπᾶσαι τὸ μωρὸ παιδί σου κι' ἐμένα τῆ

δυστυχισμένην, πού θὰ μ' ἀφήσῃς χήρα πολὺ γρήγορα, Z407

ああ、ひどいお方、あなたのそのお力が身を滅ぼさすことにな  
るのですわ。幼い子供とすぐにもやもめになろうというこの私  
のことなど、同情なさらないのですね。

ホメーロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』の中で1人称単数未来形が話し手の「意志」ではなくて「推量」を表しているのはこの2例だけである。この「推量」はどのように説明されるだろうか。

ここでまず言及しておかねばならないのはこの二大叙事詩の物語構造である。

すなわちどちらの叙事詩も1人称物語であり、登場人物が次々と物語りをしながら話を進めていくという非常に単純な構成になっている。そして未来形は直説法で語られる会話の中で、しかも話し手が聞き手と直接対峙している発話の中でのみ現れている。

η 243f でオデュッセウスは μὰ θὰ σοῦ πῦρ 「それではお話ししよう」、とアルキノオスの妃に自分の体験談を語り始める。「海原のはるか彼方にオーギュギーエとか呼ばれる島があります。その島にはアトラーズの娘、人をたぶらかす、うるわしい髪、恐ろしいカリュブソーが住んでいます。…」

次に未来時制が現れるのは彼の物語が終わり、アルキノオスがオデュッセウスに話しかけている会話の中においてである。η 315 χωρὶς να θέλῃς κανένας ἀπὸ τοὺς Φαίακες δὲ θὰ σὲ κρατήσῃ 「だが、いやがるあなたをバイエクス人の誰一人として引き止めようとはしないでしょう」

物語がこのように単純な構成になっているからこそ、未来形の基本的な用法と思われる1人称は話し手の「意志」、3人称は話し手の「推量」という簡単な図式が引き出せるのだと思われる。

物語の構成が複雑になると、未来形の用法も複雑になってくることをクセノフォンの『アナバシス』に例をとり説明しておこう。

(13) ( ἔσομαι )

Καὶ εἰς ποίαν ὠριμωτέραν ἡλικίαν περιμένω νὰ φθάσω; Διότι βέβαι  
μεγαλύτερος ἀπ' ὅ,τι εἶμαι, ὄν θὰ γίνω πλέον, εἰάν σήμερον προδοτικῶς  
παραδώσω τὸν ἑαυτὸν μου εἰς τοὺς ἐχρούς. III, i, 14

私はどれ程の年令に達するのを待とうというのか。というのも、  
もし今日私が敵に降伏したとしたり、もはやこれ以上私は齢を  
重ねることはないであろうから。

この文は窮地に陥ったクセノフォンが夜半目覚めて将来の事をあれこれと  
思案している場面を描写したものであり、いわば彼の独り言といえるもので  
ある。すなわちこの場合の自己は第三者として客観的に観察されており、3  
人称の未来は基本的には「推量」を表すのであるから、この文を読む読者も  
自然に「推量」と受け取るのだと思われる。

(11)の発話者テレーマコスも(12)のアンドロマケーも自己を第三者として  
客観的に見ているために、この場合の1人称単数未来形は「推量」を表して  
いる、とあるいは言えるかもしれない。

しかし両例ともにその「推量」というモダリティの意味も非常に弱く、単  
に「未来」のことが述べられている、と主張したほうが妥当性がありそうで  
ある。

『アナバシス』では間接話法中での未来形の用法が見出されるが、この場  
合、「意志」か「推量」かは行為の主体が発話行為者であるかどうかにか依存  
している。(例文は古典ギリシャ語)。

(14) ἔλεγον δὲ ὅτι ..... , καὶ ἤκουεν ἡγεμόνας ἔχοντες οὐ αὐτρούς, εἰάν  
σπονδαὶ γένωνται, ἄξουσιν ἔνθεν ἔξουσι τὰ ἐπιτήδεια II; iii, 6

もし休戦が成立すれば、食糧が手に入る場所へ案内するだろう  
案内者を連れて自分は来よう、と彼は言った。

未来時制で表されている行為の主体は発話行為者とは別の人なので、未来  
形の意味は「推量」である。それに対して次の例文では、案内する行為の主  
体と発話行為者は同一人物なので ἄξειν という未来形は「意志」を表している

(15) λέγει ὅτι ἄξειν αὐτοὺς πέντε ἡμερῶν εἰς χωρίον  
ὄθεν ὄφονται θάλατταν. IV, vii, 20

5日以内に海が見える所へ案内しようと言ふ

次の文も間接話法と考えてよい。そして未来形で表されている行為の主体

と計画を練る主体は共にキューロスである。従ってこの3人称の未来形は「意志」と捉えられる。

- (16) βουλεύεται ὅπως μήποτε ἐτι ἔσται ἐπὶ ἀδελφῶν, ἀλλά, ἦν δύνηται βασιλεύσει αὐτ' ἐκείνου. I, i, 4

兄の所へは二度と行くまい、そしてできれば彼に代わって何とかして王になろう、と(キューロスは)計画を練る。

### 2.2.1. 1人称複数：話し手の「意志」

- (17) ( ἐπιθήσομεν )  
καὶ σὲ σένα, γέρο, θὰ βάλομε ποινὴ β 192

お前にはな、爺さん、罰金を課してやろう。

### 2.2.2. 1人称複数：「勧誘」

- (18) ( ἄξομεν )  
ἐμεῖς δὲ... θὰ πάρωμε στὰ καράβια μας καὶ τίς γυναῖκές γους  
καὶ τὰ μικρὰ παιδιὰ τους. Δ 239

彼らの妻も幼い子供たちも船で連れていこう。

1人称複数で「勧誘」を表している古典ギリシヤ語の未来形は現代ギリシヤ語では多くの場合に接続法の形が使われている。

- (19) ( ἐάσομεν )  
ἄς τὸν ἀφήσομε κεῖνον, ε 132

この子のことはおいておこう。

- (20) ὁμως τώρα ἄς σύρουμέ στὴ θάλασσα τὴ θαυμαστὴ καράβι μελανό. A 141

だが今はさあ、黒光りのする船を輝く海へ引き降ろそう。

### 2.2.3. 1人称複数：「推量」

- (21) ( αἰρήσομεν )  
γιατὶ δὲν θὰ κυριεύσομε πιά τὴν Τροία μὲ τοὺς πλατεῦς  
τοὺς δρόμους. I 28

もう私らが道幅の広いトロイアをもう攻め取ることもできぬであろうから

2.3. 2人称未来形では、聞き手に対して話し手の意志、あるいは第三者の意

志が直接に表明されるのであるから、文脈により「要求」、「脅迫」、「運命の告示」あるいは単なる「推量」など話し手のさまざまなモダリティが示される。

### 2.3.1. 「要求」

(22) ( κικήσαι )

Πρῶτα θὰ συνανήσης τὴν κυρά μέσ' σὸ παλάτι η 53  
館の中ではまず女王様に会おうよ

### 2.3.2. 「運命の告示」あるいは「推量」

(23) ( κικήσαι )

εὔτε ζωντανὸ θὰ τὸν συνανήσης δ 546  
まだ生存している彼にお前は会うことになろう

### 2.3.3. 「脅迫」

(24) ( ἐρεῦς )

τώρα θάτισέ με, γιὰ χάρι κοιῶν τῆ θυσίασε. ποιὸ ἀπ' τὰ δύο  
θὰ πῆς γιὰ τοὺς Ἀργεῖους; E1 535

それはそうとして、お父様は一体何のためにあの子を生贖になさったのかい、言ってちょうだい。アルゴス人のためだったと言おうか

この会話はソフォクレスの『エレクトラ』の中でクリュタイムネーストラが娘エレクトラと激しく言い争いをしている場面であり、ここでの2人称未来形の使用は読者に凄みを感じさせるほど効果的である。

### 2.4.1. 3人称：「推量」

3人称の未来形は殆ど全ての例が話し手の「推量」を表しているので、特徴的な次の例だけを挙げておこう。

(25) ( ἄξει )

γιατί μὲ τὸ ζόρι δὲ θὰ τὸν ἔπαιρνε. I 692

だが(アキレウスは)決して彼を無理には連れて行かないだろう

この文は μὲ τὸ ζόρι δὲ θὰ τὸν πάρω I 429 「だが、私は無理に彼を連れて行こうとは思わない」というアキレウスの言葉を使者の使いから戻って来たオデュッセウスがアガメムノンに伝えている会話である。人称が 1

人称から 3 人称へ移行したことにより、モダリティも必然的に「意志」から「推量」へと移行している。

2.4.2. 3 人称：第三者に話し手が「意志」を及ぼそうとする場合

(26) ( ἄφεται )

οὔτε θὰ πιάσῃ τὸ πόδι μου καμιά γυναίκα ἀπ' αὐτῆς τ 344

nor shall any woman touch my foot

どんな女性も私の脚に触らぬよう

(27) ( νόψει )

αὐτή θὰ σοῦ πλύσῃ τὰ πόδια, γ 356

she shall wash thy foot

おみ脚をこの女性に洗わせましょう

3. 現代ギリシヤ語の二つの未来時制 2)

3.1. 関本至先生著『現代ギリシヤ語文法』には時称とアスペクトについても簡潔で適切な記述が見出されるので、まずそれを引用しておこう。

「時称には現在、過去、未来の 3つがあり、語尾変化その他種々の方法で示される（但し時称の区別をするのは直説法だけである）。

アスペクト (aspect, 態, τρόπος) には継続態 (継続的または反復的な行為、状態を表す) と瞬時態 (非継続的な行為を表す) とがある。継続態は”現在語幹”をもととして作られ、瞬時態は”アオリスト”語幹をもととして作られる。

時称はアスペクトと組み合わせさせて次の 8 種となる (現在時称には、継続態と瞬時態の区別がないことに注意)。

アスペクト 時称	継続態	瞬時態	完了態
現在	現在		完了現在
過去	未完了 (継続過去)	アオリスト (瞬時過去)	完了過去
未来	継続未来	瞬時未来	完了未来

未来時制にまで継続態と瞬時態の区別をひろげている点で、現代ギリシヤ語は古代語よりもアスペクト体系をより徹底させていると言える。(p.98f.)

直説法継続態未来。直説法現在形の前に不変化小辞 ἰά をつけて示す。

[註] 未来形に附される小辞 ἰά は θέλω ἰά (= ἴνα) 「私は. . . することを欲する」より由来するが、そのもとの意味はうすれ、純粋に未来時称をしめす形態となった。(p.106)

瞬時態の直説法未来。その作り方は”アオリスト語幹+第1次語尾(瞬時)”なる形の前に不変化小辞 ἰά をつける。(p.116)

### 3.2. 継続態未来の例。

未来形の用法についてはこれまでの考察で明らかのように、人称の区別がとくに重要なので、論証を統一的に進めるために、例は1人称単数、すなわち話し手の「意志」が表されている場合のみを取り上げる。

まず目につくのは瞬時態未来の用例が継続態のそれと比して圧倒的に多いことである。ホメーロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』中で371例の1人称単数未来形のうち継続態未来は次に掲示する9例だけである。すなわち、継続態未来形が現れている比率はわずかに2%である。この比率は他の人称の未来形にもあてはまることが予測される。

興味深いのはすべての例が「継続的、反復的な行為および状態を表す」というアスペクト上の観点から明瞭に把握できる点である。

(28) κὶ ἐγὼ ἀναγκαστικὰ ἰά τριγυρνᾶω μόνος μου  
μέσα στὴν πόλιν. ο 311

町ではやむをえない一人で歩き回ってしよう

(29) Μὰ καὶ στὸν Ἄδη ἀκόμα, ἂν ξεχνουσὺν ἐκεῖ τοὺς πεθαμένους, ὄμως

ἐγὼ κὶ ἐκεῖ ἰά τὸν θυμοῦμαι τὸ λατρεμένο φίλο. χ 390

たとえまた、世間の人は、死んでから冥途へ行くと、すべての記憶をなくすと言うが、それでも私だけは、あの世へ行ってもまだ愛する友のことを忘れないでしよう。

(30) ἰά τοὺς παρακινῶ μὲ συμβουλῆς καὶ λόγια. Δ 322

私がはかりごととなり、言葉で彼らを励ましておこう

(31) ὥσπου τὰ ξύλα μένουσε στερεὰ στοὺς ἀρμούς,

τόσο ἰά βρίσκωμαι ὅω καὶ ἰά ὑπομένω τὴν ταλαιπωρία ὅταν ὄμως πια  
τὸ κύμα ἰά τσακίση καράβι, τότε ἰά κολυμπῆσω, ε 362

舟の材木がまだしっかりと合わさっている間は、ここにいて  
(継続態未来)、困難に耐えてしよう(継続態未来)、だが波



が筏を打ち砕いたときには、泳ごう（瞬時態未来）。

- (32) καὶ βέβαια θά βόλσκωμαι κοντά σου, δὲ θ' ἀδιαφοροῦσω, ν 393  
もちろん、私はお前の近くにおいて（継続態未来）、お前を見捨てるようなことはすまい（瞬時態未来）。

- (33) καὶ ἐγὼ μπροστά πηγαίνοντας τὸν δρόμο παντοῦ θά ὑσπεδέωμι γιὰ τ' ἄλογα, καὶ θὰ σκορπίσω τοὺς γενναίους Ἀχαιοὺς. 0 261

私が先に行き、馬のためにすべての道を平らにしておこう（継続態未来）、そして勇敢なアカイア人を敗走させよう（瞬時態未来）

- (34) ἐγὼ θά πηγαίνω μπρὸς καὶ θαρρῶ πῶς ὁ Ἴκτορας, ὁ γιὸς τοῦ Πριάμου, δὲν θά βαστάξῃ ἐμᾶς ὅση ὄρη καὶ νᾶχη. Ɛ 374

私が先頭に立っていよう（継続態未来）、そうすればブリアモスのヘクトールがどんなにいきりたってももちこたえられないだろう（瞬時態未来）

「継続的、反復的」というアスペクト的観点以外で継続的未来を特徴付けているのは、この形式が用いられるときには、行為が何らかの形で対比的に描写されていることである。

(29)では「世間の人は記憶をなくすというが、私は忘れないでいよう」と二つの行為が対比されている。

(30)では「老人である私（ネストール）は言葉で励ましておこう」という行為に対して、「槍などの方は、もっと若い子どもが振り回すだろうから」という対照的行為がそのすぐ後で述べられる。

(31)－(32)においても行為が対比的に描写されていることはその文脈から明らかであると思う。

- (35) καὶ ἐγὼ θά σὲ ὀδηγῶ στὸ δρόμο Ɛ 261

私があなたをご案内しましょう。

- (36) καὶ θά σὲ ὀδηγήσω σὲ τόπους κατοικημένους. 0 82

（もしヘラスとアルゴスじゅうを旅したいのなら、わたしは君のために車を用意して一緒に行き）、人の住む町を案内しよう。

同じ動詞が同じような文脈で使われていて、(35)では継続態未来形が、(36)では瞬時態未来形が用いられている。これも前者では二つの行為が対比的に描写されているから、という観点から説明できるのだが、それを検討する前に過去時制における同じ問題を考察しておこう。

これまで継続態と瞬時態というアスペクトの違いが論じられてきたのは専

ら過去時制の未完了過去とアオリストについてであった。それらのさまざまな理論の中で、この問題を解決するのに最も適切である、と思われるヴァインリヒの理論をここで取り上げてみよう。

3)  
4. ヴァインリヒ H・Weinrichは『時制論』の中で時制を従来行われてきたし、今もそうである過去一現在一未来という時の三段階およびアスペクトの観点から説明する立場を批判し、テキスト言語学の立場からの物語り分析を通して、三つの意味上の標識を支柱として時制を考察している。すなわち「説明の世界」と「語りの世界」に二分される「発話の態度」, 「発話の方向」および「前景」と「背景」に二分される「浮き彫り付与」である。

ここでは現代ギリシャ語の二つの未来時制を考察する上で最も関係がある「浮き彫り付与」だけを説明しておこう。

彼はフランス語の半過去は物語りの導入部と終結部において固めて用いられる傾向があり、<sup>4)</sup>これは他のロマンス諸語でも同じである、と主張し、それを説明するのに「浮き彫り付与」Reliefgebung という概念を導入する。すなわちフランス語の半過去を背景 Hintergrund を述べるのに用いられる時制、単純過去を前景Vordergrund を述べるのに用いられる時制とする。

「前景」とは何か、何が単純過去で述べられるかを、先験的に定義することはできない。「前景」とは語り手が「前景」として把握しておきたいと思うものである。とは言え、語り手の自由裁量の余地は「語り」の二・三の基本条件によって制約を受けている。「前景」とは「語り」の根本法則に従えば、話がそのために語られるもの、概要が記載しているもの、表題が要約しているもの、人々がしばし仕事の手を休め、自分の日常ではない世界の話へと、ゲーテの言葉を使えば、前代未聞の出来事に聞き耳を立てるようにし向けるものである、<sup>5)</sup>とヴァインリヒは説明する。

ヴァッカーナーゲル J.Wackernagel は『統語論に就いての講義』の中でギリシャ語のアオリストと未完了過去についてほぼ同じことを述べている、「もし区別をしようと思うならば、一連の行為あるいは経験の主要因がアオリストによってより多く言い表され、細部に亘る詳述は未完了過去で述べられることをときおり確認できるだけである」<sup>6)</sup>

ヴァインリヒはこれをさらに明確化し「語り」の重要な構造要因として、すなわち一つの指標として取り出し、「前景」、「背景」という二つの対立する指標によって物語を分析していこうとしていると考えることができる。

「背景」とは、ヴァインリヒの説明によれば、前代未聞の出来事ではないもの、とは言え聞き手が聴取する際の手助けとなるもの、「語られた」世界

の中での聞き手の定位を容易にするものである。一言で言えば付帯事情を表すものである。

さて、物語りの導入部と終結部において半過去が用いられる傾向は二つの過去の形式を持つ他のロマンス諸語のみならず、英語にも（過去進行形により）、ドイツ語にも（ドイツ語では半過去や過去進行形に相当する形式がないので、従属節によって）その傾向が見られる、と主張する。<sup>7)</sup> 言わば「語り」の普遍的な形式とみなそうとするのである。

「語り」の終結部と導入部が典型的に現れている例として、『オデュッセイア』4巻620～631をテキストに選び物語り分析をしてみる。

4巻349～586までの237行は父、オデュッセウスの消息を尋ねてラケダイモンへやって来たテーレマコスにメネラーオスがトロイアからの自分の話を聞かせている件である。それに続いて贈り物をめぐる対話、それに続く部分である。

ὣς οὐ μὲν τοιαῦτα πρὸς ἀλλήλους ἀγόρευον, 620  
 δαιτυμόνες δ' ἐς δώματ' ἔσαν θεῖου βασιλῆος.  
 οἳ δ' ἦγον μὲν μῆλα, φέρον δ' εὐήνορα οἶνον·  
 στυον δὲ σφ' ἄλοχοι καλλικρήδεμνοι ἔπειπον.  
 ὥς οὐ μὲν περὶ δεῦπνον ἐνὶ μεγάροισι πένοντο,  
 μνηστήρες δὲ πάρουθεν Ὀδυσσεύς μεγαρόλο 625  
 δίσκοισιν τέρποντο καὶ αἰγανέησιν ἐέντες,  
 ἐν τυκτῷ δαπέδῳ ὄθι περ πάρος, ὕβριν ἔχοντες.  
 Ἄντινοος δὲ καθῆστο καὶ Εὐρύμαχος θεοειυδής,  
 ἀρχοὶ μνηστήρων, ἀρετῇ δ' ἔσαν ἔξοχ' ἀριστοῦ.  
 τοῦς δ' υἱὸς φρονόλοιο Νοήμων ἐγγύθεν ἐλθὼν 630  
 Ἄντινοου μύθοισιν ἀνευρόμενος προσέειπεν.

このように彼らは語り合っていた。客たちが神々しい王の館に  
 やって来ていた。彼らは羊を追ってやって来たのだ。そして神  
 を喜ばずぶどう酒を携えて来ていた。美しいパールを被った彼  
 らの奥方たちがパンを送ってよこしていた。彼らはこのように  
 して館で宴の準備をしていた。一方求婚者たちはオデュッセウ  
 スの館の前で円盤を楽しみ、かつ長槍を投げ合っていた、踏み  
 固めた床の上で、以前にもよくそうしていた場所で、高慢であ  
 る彼らは。アンティノオスが座っていた。また神々しいエウリ  
 ユマコスが、求婚者の頭たちが。彼らは徳において最も優れた  
 者たちであった。彼らにプロニモスのノエモンが近づきアンテ  
 イノオスに言葉をかけて、言った。  
現在分詞 アオリスト

未完過が急に固めて用いられている。実はこの数行は舞台の場面がメネラーオスの館からイタケーのオデュッセウスの館へと一転する箇所なのである。624行目からの節は、その前の節と同じく  $\omega\varsigma\ \omicron\iota\ \mu\acute{\epsilon}\nu$  という形式で始まっているのが目につく。しかし場面が変わるのは次の行からである。「求婚者たち」によって、まずそれが合図される。この語は第1巻で頻繁に出てくる語で、いわば1巻を象徴する語である。次いで「オデュッセウスの館」、こうした語彙と共に時制によってもそれが合図されると考えられる。すなわち620～624行においてメネラーオスの館での物語りの終結が「背景」の時制である未完過を固めて用いることによって合図されている。「語り合っていた」、「来ていた」、「追って来たのだ」、「携えて来たいた」、「送ってよこしていた」、「準備をしていた」、それに対して625～629はオデュッセウスの館での物語りの導入部である。「楽しみ」、「座っていた」、「であった」さらには現在分詞の「投げ合っていた」、もこの中に入れて良いと考えられるのであるが、すべて「背景」の時制である。そして630行目の  $\epsilon\gamma\gamma\acute{\upsilon}\theta\epsilon\upsilon\ \epsilon\lambda\theta\acute{\omega}\nu$  (近づき,7オリスト分詞),  $\pi\rho\omicron\sigma\acute{\epsilon}\epsilon\iota\pi\epsilon\upsilon$  (言った,7オリスト)によって本来の物語りの筋が始まる、と分析できる。

4.2. ヴァインリヒがロマンス諸語の文学作品をテキストにして半過去と単純過去の物語りの中での使用分布に関して得たのと同じ結論が得られる。

しかしここで注意しなければならないことは、これはあくまでも物語りの構造分析であり、未完了過去とアオリストという二つの過去の意味あるいは用法の説明にはならないことである。

私自身は未完了過去とアオリストの説明は伝統文法の記述で充分でありアスペクトの観点からの詳細な分析は必要ではない、むしろそれは学習者に余分な負担を強いることになると考える。

(37) καὶ ἐδίδουν αὐτῷ πλεῦν ἐσμυρνισμένον οἶνον. Mc 15,23

そして彼らはイエスに没薬を混ぜた葡萄酒を飲むようにと渡し  
うとした、が彼は受け取らなかった。

「葡萄酒を渡し」行為が完了していないことは明らかである。行為が未完了だからこそ、その行為を記述するのに未完了過去形式が使われている。これ以上何の説明が必要だろうか。

類例を二・三挙げておこう。

(38) καὶ ἐδίδουν αὐτῷ ῥαπίσματα. J 19,3

そして彼らは彼に平手打ちを与えようとした

- (39) καὶ οὐδεὶς ἐδίδου αὐτῷ. L 15,16  
 誰も彼に与えようとしなかった
- (40) καὶ ἐδίδου τοὺς μαθηταὺς παρατιθέναι τῷ ὄχλῳ. L 9,16  
 群衆に配るようと弟子たちにお渡しになさろうとした
- (41) καὶ ἐδίδου αὐτοῖς ἐξουσίαν πνευμάτων τῶν ἀκαθάρτων, Mc 6,7  
 そして彼らに悪霊を制する権威を授けようとなされた

未完了過去が「継続性」を示すことがあることは次のような例でよく分かる。

- (42) καὶ ἄλλα ἔπεσεν εἰς τὴν γῆν τὴν καλὴν καὶ ἐδίδου καρπὸν ἀναβαίνοντα καὶ αὐξανόμενα καὶ ἔσπερον εἰς τριάκοντα καὶ ἐν ἐξήκοντα καὶ ἐν ἑκατόν. Mc 4,8  
 他のものは良い地に落ちたそして芽を出し、成長し実を付けてゆき30倍、60倍、100倍にもなっていた。

#### 4.3. 伝統文法の時制体系の普遍性について。

ゴート語の時制体系では完了時制、未来時制及び未完了過去が欠けている。ゲルマン諸語はそれぞれ迂言形式によって消失したそれらの時制をとり戻していったと思われるのだが、ドイツ語では今も進行形は欠けているし、未来時制もあまり使われない。さらに日常会話では過去のことを表すのに通常現在完了が使われるが、これはラテン語で単純過去と完了が融合して完了過去になったことを思い起こさせる。

結局、現在のドイツ語の時制体系はゴート語の現在と過去の二つの時制で構成される時制体系とあまり変わっていないのではないと思われる。逆に日本語の時制体系はギリヤ語の時制体系に非常によく対応するように思われる。

『ゴート語聖書』の中で、シュトライトベルクがゴート語と対比させているギリシャ語原典で δίδωμι の現在完了形は次の11の用例に現れている。その全ての用例で、日本語でも「～した」という単純過去とは違った表現形式が要求されることは明らかである。それはギリシャ語の現在完了という時制に対して、日本語でも現在完了という時制が対応しているからだと思う。

- (43) ἴδου δέδωκα ὑμῖν τὴν ἐξουσίαν τοῦ πατεῖν ἐπάνω ὄφειν καὶ σκορπίων καὶ ἐπὶ πᾶσαν τὴν δύναμιν τοῦ ἐχθροῦ, L 10,19  
 見よ、私はあなた方に、蛇やサソリを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ちかつ権威を授けている。
- (44) ἐγὼ δέδωκα αὐτοῖς τὸν λόγον σου, J 17,14

私は彼らにみ言葉を与えております

- (45) ἐφανέρωσα σου τὸ ὄνομα τοῦ ἀνθρώπου οὗς δέδωκάς μοι ἐκ τοῦ κόσμου. J 17,6

主から賜っている人々に御名を表しました

- (46) σοι ἦσαν καὶ ἐμοὶ αὐτοῦς δέδωκας J 17,6

彼らは主のものでしたが私に下さっています

- (47) ὅτι τὰ ῥήματα ἃ δέδωκάς μοι δέδωκα αὐτοῦς, J 17,8

なぜなら頂いております言葉を彼らに与えているからです

- (48) τήρησον αὐτοῦς ἐν τῷ ὀνόματι σου ᾧ δέδωκάς μοι J 17,11

私に賜っている御名によって彼らをお守り下さい

- (49) οὗς δέδωκάς μοι ἐφύλαξα. J 17,12

お預かりしている方々をお守りしました

- (50) οὗς δέδωκάς μοι οὐκ ἀπώλεσα ἐξ αὐτῶν οὐδένα. J 18,9

お預かりしている方々の一人も失いませんでした

- (51) οὐ Μωσῆς δέδωκεν ὑμῖν τὸν νόμον J 7,19

モーセはあなた方に律法を与えていないか

- (52) τὸ ποτήριον ὃ δέδωκέμ μοι ὁ πατήρ, οὐ μὴ πῶ αὐτό; J 18,11

父から授かっている杯は飲むべきではないのか

- (53) ὑμῖν δέδοται γινῶναι τὰ μυστήρια τῆς βασιλείας τοῦ θεοῦ. L 8,10

あなた方には神の国の奥義を知る事が許されている

### 5.1. 継続態未来

この未来時制の用法は「継続態未来」という文法述語ですべて言い表されていると思う。すなわち継続的行為の「意志」が表されている。これがこの時制の意味である。そして使用分布という観点から考察するならば、継続態未来で表されている行為は同じ文脈の中で瞬時態未来で表されている行為と対比的に用いられている。

(28) 歩き回ってしよう

(29) 忘れないでしよう

(30) 言葉で励ましておきましょう

(31) ここにいて困難に耐えてしよう

(32) 近くにいて

(33) 平らにしておこう

(34) わたしが先頭に立ってしよう

ところで(35) 「ご案内いたしましょう」はどのように説明されるだろうか

「わたしたちが人の田畑を歩いている間は、腰元たちと一緒にロバと車の後をついてくること。わたしがご案内しましょう。しかしわたしたちが町にはいったら、その町を高い塔が取り巻き、立派な港が両側にあり、町の入り口は狭く、両端の高く反り上がった船が道を見張っています。皆の船置き場がそこにあるからです」

ナウシカーは「町に入ったら、ついて来てはいけません」と言いたいところを町の状況を説明することによってオデュッセウスに私について来てはいけない事をそれとなく分からせようとしたと思うのだが、ここでも二つの行為が対比されている。

それに対して(36)の「お前を人の住む町へ案内しよう(瞬時態未来)。誰もわれわれがてぶらで立ちさるようなことはさせないだろう(瞬時態未来)。」では行為がただ羅列されているのだ、と主張できる。

5.2. アスペクトという観点からは未完了過去は継続態未来と全面的に対応するのではなく、前者が「継続性」を表すときにのみ未完了過去は継続態未来と対応する。とは言え、過去時制における未完了過去とアオリストの関係を前者を有標、後者を無標の対立と捉えるとき、未来時制においても継続態未来を有標、瞬時態未来を無標と捉えられるのでその点で両者の関係は同じであると言える。

すなわち古典ギリシャ語において有標と無標の対立を示す時制は未完了過去とアオリストの過去時制だけだったのに対して現代ギリシャ語ではそれに未来時制が加わっている。しかし英語に見られるような現在進行形はないので、現在時制ではその対立はない、と記述できる。

6. 過去時制において有標：無標という対立する二形式のうち一つを消失してしまい、その対立を解消してしまった言語を母国語とする人が二つの過去時制を保持している言語の時制体系を理解しようとするとき、いかに苦勞するかを示すためにヴァッカーナーゲルの言を引用しておく。「直説法アオリストと未完了過去の間の基本的な差異は十分に明らかにされている。しかしわれわれは何も自己を偽るつもりはない。しばしば、そしてまさに最古のギリシャ語において、さらには完成期の散文家たちにおいて、何か過ぎ去ったものについて述べる場合の未完了過去とアオリストはわれわれの語感ではゴチャゴチャと入り組んでいるのである。ホームーを取り上げてみよう。アルゴスの統治権に関し、笏杖がどのように世代から世代へと伝わったかを述べる件で、B 106  $\text{Ατρεΰς δὲ θυήσκων ἔλιπεν πολύαρον θυέστην}$  [アトレウスは

死に際に、羊を沢山持っていたチュエステースに残した]、そのすぐ後で  
 αὐτὰρ ὁ αὐτε θυέστ' Ἀγαμέμνονι λείπε φορῦνας (πολλῆσι καὶ Ἄργει παντὶ  
 ἀνάσσειν. 筆者補) それをまたさらにチュエステースがアガ멤ノーンに携  
 えるべく残そうとした(沢山の島々とアルゴス全域を支配するようにと)]  
 ここでは同じ事実が同じように形成された文の中で、ある時は ἔλυεν (アリス  
 ト)によって、ある時は λείπε (未完通)によって表現されている」<sup>8)</sup>

未完了過去とアオリストのこの用法の違いは、有標：無標という二つの過  
 去形式をもっていると思われる日本語を母国語とするわれわれの語感ではゴ  
 チャゴチャと入り組んでいないことは明らかである。 <完>

[本稿はギリシア語・文学研究会第2会研究発表会で口頭発表したものに  
 加筆したものである]

#### [註]

- 1) 言語文化研究 (広島大学総合科学部紀要 V) 第10巻1984年
- 2) 関本 至 「現代ギリシャ語文法」泉屋書店 1968年
- 3) Weinrich, Harald: Tempus, Besprochene und erzählte Welt  
 Stuttgart, 1984年
- 4) 同上書 p. 93
- 5) 同上書 p. 94
- 6) Wackernagel, Jacob: Vorlesung über Syntax I p. 183
- 7) Weinrich, p. 93
- 8) Wackernagel, p. 182f.

#### [資料]

ΟΜΗΡΟΥ ΙΛΙΑΣ μετάφρασις-σημείωσις Α.ΠΑΠΑΓΙΑΝΝΗ-ΣΗΦΑΚΙ  
 (ΤΑ ΑΠΑΝΤΑ ΤΩΝ ΑΡΧΑΙΩΝ ΕΛΛΗΝΩΝ ΕΥΓΡΑΦΕΩΝ: ΠΑΠΥΡΟΣ)  
 ΟΜΗΡΟΥ ΟΔΥΣΣΕΙΑ εισαγωγή-μετάφρασις-σημείωσις Γ.Δ.ΖΕΥΤΑΗ

(同上叢書)

ΣΟΦΟΚΛΕΟΥΣ ΗΛΕΚΤΡΑ ε.-μ-σ. Β.Ι.ΔΗΜΑΡΤΟΥ (同上叢書)

Wilhelm Streitberg, Die gotische Bibel Heidelberg 1919

Novum Testamentum Graece ed. Everhard Nestle 1975

Xenophontis Opera Omnia III ed. E. C. Marchant (OCT)